

# 絵本を用いた自伝的記憶の想起課題による 循環的な学びの試み

Attempt of the cyclical learning which is due to the exercise  
of the autobiographical memory using a picture book

稲垣 馨  
(こども学科 講師)

**要旨** 本研究では、保育士・幼稚園教諭養成校の短期大学生に対して、絵本を用いた自伝的記憶の想起課題を実施することで、循環的な学びのモデルを探索的に生成することが目的である。青年期以降は、時間軸上に過去の経験によって構築された自己を引き出し、そこに新たな経験で得た意味付けを加えて再び内界に納めていく作業が、豊かな学びにつながるモデルであると思われる。そのためには、学生各々の連続性のある自己を認める教員との関係性を基盤にして、保育者としてのアイデンティティの獲得に向かうような、自己の発達を支える環境を提供することが重要であると思われた。

【キーワード：循環的な学び 自伝的記憶 保育者のアイデンティティ】

## 1. はじめに

### 1. 本研究の目的

幼児期において、言語を獲得し、表現する能力を修得することは、発達上の重要な課題である。言葉は思考やコミュニケーションの土台となって、他者との豊かな関係性を構築する機能を持つ。特に子どもの場合、言葉は他者との関係性に基づく自己の在り方を表現したものとなる。

幼稚園教育要領<sup>5)</sup>及び保育所保育指針<sup>2)</sup>では「言葉」がねらいの一つとしてあげられており、教育や保育の現場で絵本や物語を使用することの重要性について言及されている。教育や保育場面で絵本や物語、紙芝居などを読み聞かせることは日常的に行われており、子どもの家庭生活場面でも頻繁に体験されることであろう。中でも絵本は、幼児にとって言葉を学ぶための身近なメディアの一つであると言える。

保育士や幼稚園教諭を目指す学生にとっても、絵本を読む、お話を聞くということは子ども時代に体験したことであり、実習場面でも取り組みやすい活動である。しかし身近で取り組みやすい反面、絵本の読み聞かせの効果や意義を認識した上で保育場面に導入するという構えがおろそかになりがちであるという問題を孕んでいる。

保育場面で用いられる絵本に関する研究を概観すると、大きく次の二つの流れに分けられる。一

つは保育者がどのように絵本を選択し使用しているのかという、保育ツールとしての絵本に対する保育者側の意識を問うもの<sup>11) 14) 16) 18) 26) 27) 28) 35)</sup>(太田, 2010;尾崎, 2005;工藤, 2008;佐藤, 松井, 上村, 祝, 趙, 2007;添田, 数中, 2011;高橋, 藤, 2007;長根, 2005;松井, 佐藤, 上村, 2007など), もう一つは聞き手である子どもに絵本の読み聞かせを行うことはどのような影響があるのかという、絵本や読み聞かせの効果や意義に関する研究<sup>13) 17) 39) 41) 42)</sup>(奥山, 香曾我部, 2008;佐藤, 西山, 2007;森光, 関, 2010;横山, 1999;横山, 水野, 2008など)である。保育者養成の目的で絵本や読み聞かせを用いた試みも見られるが<sup>8) 12) 15) 30)</sup>(秋政, 中山, 伊藤, 2009;奥山, 2009;尾上, 中根, 村田, 2006;広渡, 松井, 小坂, 2008など), 絵本を用いた自伝的記憶の想起課題によって保育者を目指す学生の自己の成長を促すような研究<sup>19)</sup>は少ない(佐々木, 2000)。

佐々木<sup>19)</sup>は『絵本の心理学』の中で、子どもと深く関わるような教師や親の場合、複雑な子どもの発達を受け止めて理解し、解釈する能力を自分自身が持たなければならないと指摘している。そのため「自分の中に発達を読む」という、自己の内奥を掘り起こすような作業が必要であるという主旨のことを述べている(2000, pp.200-201)。つまり自らの内的世界を省察し、子どもの心と共鳴できるような能力のようなものを指している

考えられる。

佐々木は「自分の中に発達を読む」方法として、大学1年生の講義の中で、空想遊びをテーマとした絵本が、子ども時代のごっこ遊びの回想記録に与える影響についての探索的な研究を行っている。子どもの世界の中心にある「遊び」という切り口によって課題を提示することは、学生たちに「自分のなかに発達を読む」ことを促す環境を与えることが出来ると述べている。しかし佐々木は、回想という行為が持つ機能が結果に与える影響については触れていない。また研究の成果を生きた材料として、実際の教育に還元するような試みもその後の課題として残されている。

本来学びは単なる受け身的な行為ではなく、体験知と内なる自己との対話が繰り返されて内的な変容が促進され、再度外界に向けて新たな知が発信されるという流れが繰り返される循環的なものであると言えよう。筆者が接する、いわゆるゆとりの中で育った学生は、多くの体験学習の機会を有しており、体験から学ぶことの意義は認識している。しかし体験の過程で得られた自他への気づきと自己の内部との対話によって、内的な変容を促す段階まで至る学びを得ることは容易ではない。本来ならば「体験的な知」は、従来持っていた自己の枠（シエマ）の中で同化と調節<sup>23)</sup>（ピアジェ、2007）の相互的なプロセスを経て、協応や分化に帰結していくものである。

そこで本研究では、保育士・幼稚園教諭を養成する短期大学の1、2年生に対して、身近な保育のツールである絵本を用いた自伝的記憶の想起を中心とした課題を実施し、保育士・幼稚園教諭養成教育における循環的な学びのモデルを探索的に生成していくことを目的とする。

## 2. 幼稚園教育要領における絵本の活用について

幼稚園教育要領の第2章<sup>15)</sup>では「健康」、「人間関係」、「環境」、「言葉」、「表現」のいわゆる5領域について、それぞれのねらい及び内容が明示されている（新学習指導要領・生きる力 幼稚園教育要領の第2章1）。中でも「言葉」のねらいは、「(3) 日常生活に必要な言葉が分かるようになるとともに、絵本や物語などに親しみ、先生や友達と心を通わせる。」と示されており、絵本や物語の活用を勧めている。これは単なる言語獲得のためのツ

ルとして絵本や物語を用いるのではなく、他者との関係性を形成する際の橋渡しとして、絵本や物語の活用を提唱していると言える。

さらに3.の内容の取扱いにおいては、「(3) 絵本や物語などで、その内容と自分の経験とを結び付けたり、想像を巡らせたりするなど、楽しみを十分に味わうことによって、次第に豊かなイメージをもち、言葉に対する感覚が養われるようにすること。」と述べられており、絵本や物語を活用するねらいの意義とその効果について触れている。これは自身のこれまでの体験による表象と絵本体験における表象を重ね合わせることで、想像の世界を膨らませて理解を深め、豊かで言語的な感覚や能力を身につけることを意図している。つまり幼稚園教育要領では、絵本や物語を活動場面に導入することは、他者（教師、友人など）との共感的な場を形成し、そこでの生き生きとした体験によって子どもの言葉と心の成長を目指していると言えよう。このように幼稚園教育では、各々の活動や体験が子ども自身の育ちの経験として体系化され、一つの学びへとつながって行くことを目標にしている。

絵本の読み聞かせは保育場面でよく見られる活動である。保育者に絵本を読んでもらう体験を積み重ねることで絵本の世界を楽しみ、ペープサートを作成して演じ、さらにはごっこ遊びや劇遊びに発展することもある。子どもは自分の世界に絵本の世界を取り込み、咀嚼して十分に遊んだ後には、今度はそれを外に向けて他者に提示出来るものに作り変えて発信していく。作られた絵本の世界と現実の世界を行き来しながら、絵本の受け手と体験知を発信する作り手としての体験を通して、自在に自己を織り込んだ新たな世界を創造していくのである。

高濱<sup>37)</sup>は「人間が言語を獲得しうるような生得的基盤をもつとしても、そこにスイッチを入れるような人物の存在が不可欠であること、さらに対人的なかかわりのなかで言語を獲得していくことが重要なのである。」（2007, pp.31）と述べ、言語の発達の基盤となる関係性の大切さを強調している。保育現場では、子どもの環境を提供する保育者との関係性を基盤として、子どもを取り巻くさまざまな関係性の中で相互作用的な学びの場が創り上げられて行く過程が、子どもの言語の獲得

を支えていると言えよう。

### 3. 自伝的記憶とナラティブの関係について

今回心理学の授業の中で、学生が絵本を読んで想起した子ども時代のエピソード（自伝的記憶）をまとめてレポートを作成する課題を与えた。次に小グループ内で自分が選んだ絵本の読み聞かせを行い、同時に自身のエピソードの内容をまとめて発表させた。一連の課題は、まず絵本のストーリーと重ねて自伝的記憶を想起することで「自己の中に発達を読」み、さらにそれを他者に向けて語ることで、これまでの自己を意味のあるものとして体験することを意図している。

#### 1) 自伝的記憶とは

自伝的記憶とは、その人がこれまでの人生で経験してきたさまざまな出来事（エピソード）に関する記憶をさす。エピソード記憶の中でも自己（セルフ）と密接に関連しているのが自伝的記憶の特徴であると考えられている（佐藤，2008）<sup>31)</sup>

これまでの研究によって、自伝的記憶には大きく分けて

- (1) 自己（self: 自己の一貫性や自己評価を支える），
- (2) 社会的（social: 対人コミュニケーションに寄与する），
- (3) 方向付け（directive: 行動や意思決定を支えたり、動機づけるのに役立つ）

という3種類の機能が存在していると言われている<sup>31) 32)</sup> (Bluck, et al.,2005; Bluck,2003)。

第一の「自己」機能は、自己の連続性や変容、自己概念の保持等をさす。それは時間軸の中で自己の一貫性を確認したり、また脅かされそうになった場合に自分を変容させたりする機能である。第二の「社会的」機能は、自伝的記憶がナラティブとなって他者に開示されることにより、対人相互作用を促進させる機能をさす。自伝的記憶を想

起し、ナラティブを媒介して他者と共有することは、他者の共感を呼び起こしたり、他者との結びつきを堅固なものにする。第三の「方向付け」機能は、将来に向けて計画を立て、意思決定するために活用される記憶の機能である。これらの機能は、心理療法で自己を想起することの意味とも重なるところであろう。

#### 2) 自伝的推論機能と自我同一性の達成・維持へーナラティブを媒介に

これまで自己についてのさまざまな理論は、記憶と密接な結びつきがあることを暗黙の前提としてきた<sup>22) 29)</sup> (下島，2008；野村，2008など)。近年記憶と自己を結びつける過程として、「自伝的推論（autobiographical reasoning）」機能が注目されている。これは内省的な思考過程であり、想起された出来事を解釈・評価し、過去の記憶を互いに結びつけ、さらに現在の自己と結びつけたりする過程をさす。このような過程はライフストーリーを構成し自己の一貫性を確認するために不可欠である<sup>33)</sup> (Bluck & Habermas,2000)。

体験と自己を結びつける自伝的推論は、青年期から60歳ごろにかけて増えて行くという報告がある<sup>34)</sup> (Pasupathi & Mansour,2006)。これはアイデンティティの発達理論を提唱したエリクソン Erikson,E.H.10)の生涯発達の観点から見た場合、青年期の課題であるアイデンティティの確立から老年期の課題である統合に至る発達の過程において、自伝的推論が重要な機能を果たしていることを示唆していると言えよう。

自己を語ることに想定される機能の一つとして人生を意味づける機能があげられるが、これは自我同一性の達成・維持に通じると考えられてきた（佐藤，2008）<sup>3)</sup>。自我同一性の達成・維持とは、過去から未来へと続く時間軸上に、自己の連続性を見出す主観的な感覚である。「自分とは何なのか、私とは何者なのか」という自らの問いに向けた語

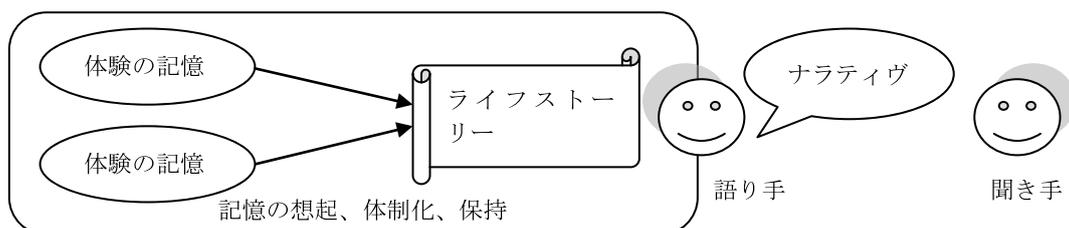


図1 自伝的記憶の想起からナラティブへの流れ

りによって形成されていくものである。主観的な自己の同一性の感覚（アイデンティティ）を保持できるのは、断片的な体験の記憶が体制化され連続した「私」を成しているからである。人が過去を振り返って語る時、自伝的記憶が想起され、自己という枠組みに沿ってさまざまな出来事の体験の記憶が体制化されて、それが一旦保持された後にライフストーリーが形成される。さらにそれを意味づけられた結果として他者に向かって開かれ語る際に、ナラティブが生成される（図1）。

## II. 方法

### 1. 手続き

筆者が担当している心理学の講義で、保育士・幼稚園教諭養成校の短期大学生（1, 2年生, 女子のみ）に対して、絵本の物語から連想した自伝的記憶の想起を求める課題を実施する。

#### 1-1. レポート作成と発表まで

レポート作成のプロセスは以下の通りである。なお、自伝的記憶の例として、佐々木の本の中に例示されている、学生の探検遊びの話を紹介した<sup>19)</sup>（佐々木, 2000, pp.135-137）。

- 1) まず自分が好きな絵本を選ぶ。2年生はこれまでの実習で、ある程度絵本を使用する機会を体験しており、絵本を選択することに困難がないものと予想されたため、自由に選択できるものとした。1年生には子どもの心を理解するための絵本データベース<sup>19)</sup>（佐々木, 2000）を利用し、筆者が作成したリストから選択するものとした。
- 2) レポートを作成する前提として、絵本の主題（テーマ）の確認をする、ストーリーの中で主題がどのように描かれているのかを確認する、あらすじをつかむという視点を提示した。
- 3) 2)に加えて、テーマにそって主人公の体験は発達のどの段階で起こってくるのかなかを考えながら内容（あらすじ）をまとめるよう指示した。
- 4) 次に絵本を読んで想起した自分自身の子ども時代の体験についてまとめる。絵本と同じ体験である必要はなく、自由に記述してよいものとした。

今回の課題は自伝的記憶を想起するという行為に着目しているため、想起のキーワードを設定せず、自由に自伝的記憶を想起する課題とした。

#### 1-2. 発表と全体の感想

上記3)と4)について、絵本の読み聞かせとともにグループで発表した。発表は7人程度の小グループで行った後、グループの代表による全体での発表を実施した。課題実施後に、今回の課題に対する感想を自由記述した。課題に対する感想は以下の項目である。なお1)については、学生自身の客観的な気づきを促すことを意図して、グループ内の他者評価をまとめて記述するよう指示している。

##### 1) 発表に関する他者評価項目

###### (1) 絵本の発表について

絵本の読み方（声の調子・速さなど）、絵本の選び方など

###### (2) エピソードの発表について

発表の仕方（声の調子・速さなど）

###### (3) エピソードの内容について

内容のおもしろさ、まとめかた、他メンバーとの比較

##### 2) 課題に対する自己評価と感想

レポート提出から発表まで、プロセス全体を通じての自己評価と感想

## 2. 結果の分析方法

レポートで課した自伝的記憶のストーリーは、テーマ別にカテゴリー分類を行う。またレポートの感想からもストーリーに関する記述を抽出し、KJ法で内容を分析する。

## III. 結果

2010年10月の後期授業の中で課題を提示し、1カ月後を提出期限としたが、この時期は2年生の保育所実習と重なっていた。1年生75名、2年生58名（平均年齢19.6歳）合計で133名のデータが得られた。

### 1. 絵本の選択と自伝的記憶のテーマについて

カテゴリー分類結果（図2参照）

1, 2年生で絵本の選択方法に違いがあったが、自伝的記憶のストーリーのテーマは共通しており、

1) 遊びの体験, 2) 「関係性」のテーマ, 3) 「個」のテーマ, 4) 喪失体験の4つのカテゴリーに分けられた(表1参照)。

2年生は実習で実際に使用した絵本を選択したものが多く, 特に生活習慣の自立(トイレトレーニング, 着替え, 歯磨きの自立など)に関する本を選択した学生が多く見られた。そのため自身のエピソードも同様のものが増えてきている。これは絵本が, 保育場面や家庭でも躰のために利用するなど, 教育的な目的を持って頻繁に用いら

れていることが理由であると思われる(例として『おふる はいらないもん!』<sup>24)</sup>など)。

自伝的記憶のテーマで最も多かったのが, 「個」の自立や自己に関するテーマであった。「関係性」と「個」のテーマを合わせると, 1, 2年生とも約7割を占めている。

選択された絵本の例をテーマ別に分類すると以下の通りである。次に内容について, 具体的な記述を取り上げながら, 簡単にまとめる。

表1 エピソードのテーマ別 課題に選択された絵本の例

作品名	作	絵/訳	出版年	出版社
<b>1. 遊びの体験</b>				
まほうの夏	藤原 一枝・はた こうしろう	はた こうしろう	2002	岩崎書店
こんとあき	林 明子(作・絵)		1989	福音館書店
おしいれのぼうけん	古田 足日	田畑 精一	1974	童心社
ゴリラさがしにしゅっぱつだ!	岡田ゆたか(作・絵)		1998	チャイルド社
<b>2. 「個」のテーマ: 自立や自己</b>				
はじめてのおつかい	筒井 頼子	林 明子	1977	福音館書店
いつかはきっと	シャーロット・ゾロトフ	アーノルド・ローベル(絵)、矢川 澄子(訳)	1975	ほるぷ出版
がまんのケーキ	かがくい ひろし(作・絵)		2009	教育画劇
ぼくだけのこと	森 絵都	スギヤマカナヨ	2003	理論社
<b>3. 「関係性」</b>				
そんなのずるいや!	アニタ ハーパー	スーザン ヘラルド(絵)、小川 仁央(訳)	1989	評論社
しゅくだい	いもと ようこ(作・絵)		2003	岩崎書店
だいじなだいじなからもの	こもりまなみ(作・絵)		2001	主婦の友社
あわぶくかいじゅうモクモクだい!	浅野 ななみ	米山 永一	1991	金の星社
ママってすてき!	Yokococo(作・絵)	石津 ちひろ	2006	主婦の友社
くまのコールテンくん	ドン・フリーマン(作・絵)	松岡 享子	1975	偕成社
おきにいり	田中 清代(作・絵)		1998	ひさかたチャイルド/チャイルド本社
いもうとのにゆういん	筒井 頼子	林 明子	1987	福音館書店
<b>4. 喪失</b>				
14ひきのひっこし	いわむらかずお(作・絵)		1983	童心社
わたしはおねえちゃん	荒井 良二(作・絵)		1990	アスク講談社
ずーっとずっとだいすきだよ	ハンス・ウィルヘルム(作・絵)	久山 太市	1988	評論社
ちょっとだけ	瀧村有子	鈴木 永子	2007	福音館書店
わすれられないおくりもの	スーザン・バーレイ(作・絵)	小川 仁央	1986	評論社

1) 遊びの体験  
遊びの種類は, ごっこ遊び, 自然遊び, 探検遊び,

一人遊び, 集団遊びなどであった。「主人公と同じように」「私も」このような遊びをした等, 絵本の

主人公と重ねて自らの子ども時代を懐かしく想起した内容の記述が多く見られた。例として、「自分も小さい頃泥遊びをよくしていた。絵本の主人公と同じように、ぴかぴかの泥団子を作るのが好きだった。」(1年生)「私も秘密基地や宝物を埋めたりして遊んでいた。」「私もよくかくれんぼをしていたが、隠れるのが難しくてすぐ見つかってしまいました。」(2年生)などの記述が見られた。

2)「関係性」のテーマ

家族や友人など、重要な対象とのエピソード(けんか、触れ合い、新しい同胞の出現による葛藤など)の記述が見られた。重要な対象とは、両親、兄弟、祖父母、ペット、隣人、先生、友人であった。記述例としては「子どもにとって親の存在は大きいと思った。」「母の大きな手は布団よりも温かく、私はこの人にしっかり守られているのだな、という安心感に満たされた。大きなぬくもりに包まれていて、とても心地よかった。」(1年生)、「年の近い姉妹だったからこそこの体験だったのではないかと思う。この頃の子どもには年の近い身近な存在が重要だと思う。」「過去の経験を思い返してみると、母と父は、私たちの夢を壊さないために、嘘をついていたのだと思った。親を信じる子どもは心はとても純粋で素晴らしいものだと思う。」(2年生)などであった。中でも母親とのエピソードを取り上げた学生が多かった。また今回の課題をきっかけに、幼少期のエピソードを家族と話す機会を持った学生もみられ、忘れていた幼少時の記

憶を懐かしく振り返る体験になったようであった。

3)「個」のテーマ

「個」の自立や自己に関するテーマは多岐に亘った。エピソードの例として、生活習慣の自律、自立的な行動(はじめてのおつかい、留守番など)、自己主張の始まりなどであった。「お姉ちゃんになるという自覚を持つと同時にしっかりしなきゃと思うようになれることは、自立の一步なのかなと思いました。」「自己を確認するのは、文字や形でなくても、人と人とのコミュニケーションや伝わってくるぬくもりでもできることだと考えた。」(1年生)、「(絵本を真似て)遊びの中でも何かを植える活動を入れたごっこ遊びをやったが、この体験で私自身成長できたのではないかと思った。」「弟を連れ、手を引いて歩きました。大人がいないことで自分自身で何とかしなければいけないという思いが生まれ、自立心が芽生えます。」「母にちゃんとひとりで留守番が出来たことなど得意げに話しました。少し大人になれた気持ちになれました。」(2年生)などの記述が見られた。「個」のテーマでありながらも、重要な他者との関係性を中心とした記述が多く見られた。

4) 喪失体験

「久しぶりにこの絵本を読んで、改めておばあちゃんとの思い出がよみがえりました。」(2年生)など、祖父母やペットの死、母親の入院に伴う分離、引っ越し、ぬいぐるみなどの移行対象に関するエピソードの記述が見られた。

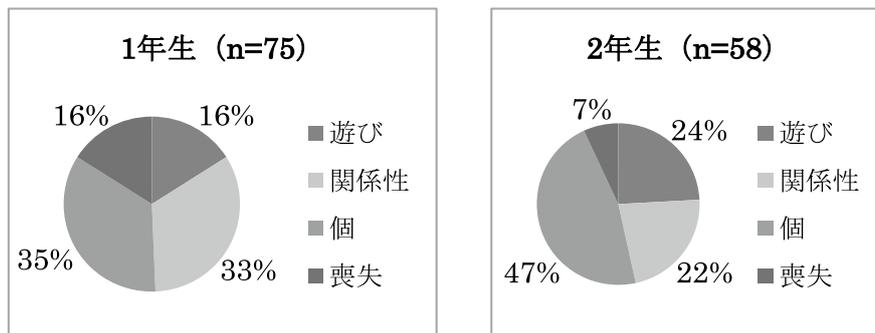


図2 自伝的記憶のテーマ カテゴリー・学年別集計結果

2. 自由記述の分析結果

レポート及び発表の感想の自由記述に関して分析を行った結果、次の5つの視点が得られた(表2, 3参照)。具体的な記述を取り上げながら1, 2年生間の比較を中心に結果をまとめる。

学年別に比較した結果、顕著であったのは将来

保育者として働くことについての意識の違いであった。これは1年生の場合、実習体験も少なく、未だ保育者になる自覚や職業的な意識が薄い、2年生は就職活動に追われて現実的に保育者になることを強く意識する時期にあるという、それぞれが置かれた状況の違いが記述にも反映された結果

であると思われた。

1) 絵本の読み聞かせの意識に関する記述—保育者としての構えの気づき

2年生に比べると絵本の読み聞かせの経験が少ない1年生の場合、具体的な発表や絵本の読み方の評価が記述の中心である場合が多く見られた。例として「緊張した気がするけど、一定の速度で

読むことは心がけていたので、ほめてもらえました。(中略)今日の発表を踏まえ、実践する時はもっと頑張ろうと思います。」等、絵本の読み聞かせに関する評価結果を今後につなげて活かしたい、という意欲を示す記述が多く見られた。また『『お風呂入らないと汚い』など、子ども達に教えたい時にこの絵本を読んであげると良いと思った。』など、保育者になった時の絵本の活用や目的への気

表2 テーマ別自由記述によるエピソードの感想

テーマ	学年	記述内容
遊び	1	自分も小さい頃泥遊びをよくしていた。絵本の主人公と同じように、びかびかの泥団子を作るのが好きだった。
		実習でも子ども達がままごとやお店屋さんごっこ、ワンピースごっこなどを男女で楽しく遊んでいました。
	2	私は小さいころ(ごっこ遊びに)参加していても、あまり楽しくやっていたと思いませんでした。でも先生になる私は楽しくやらなければいけないと思いませんでした。
		私も秘密基地や宝物を埋めたりして遊んでいた。 私もよくかくれんぼをしていたが、隠れるのが難しくてすぐ見つかってしまいました。
関係性	1	あの頃の自分の気持ち、相手の気持ちも今になると理解できた。
		子どもにとって親の存在は大きいと思った。
		母の大きな手は布団よりも温かく、私はこの人にしっかり守られているのだな、という安心感に満たされた。大きなぬくもりに包まれていて、とても心地よかった。
	2	やっぱり子どもにとって親はとても大事な存在なんだと思いました。
		年の近い姉妹だったからこそこの体験だったのではないかと思う。この頃の子どものには年の近い身近な存在が重要だと思う。
		過去の経験を思い返してみることで、母と父は、私たちの夢を壊さないために、嘘をついていたのだと思った。親を信じる子どもの心はとても純粋で素晴らしいものだと思う。 小さい頃を振り返ってみることが出来る良い機会でした。兄や両親との会話ははずみませんでした。 母も子どもを留守番させることは初めてだったので、不安な気持ちもあり、買い物も急いでしてきたんじゃないかなと思います。
個	1	今思うと、運動会を通して、たくさんのかんじ、思い、経験していたのだな、と改めて思いました。
		母が私を責めずにしてくれたことで、受け入れてくれる人の存在に気付いたのだ。
		弟の小さい頃の絵本を読んで思い出せてよかったと思いました。
	2	妹も幼稚園に通っていた頃、2〜3歳のころを「昔」と言って話していました。本人は生きてきた中でもう昔のことなのかかもしれないけど、その頃私は1〜2年でしかないのに、「昔」というのは変だと思っていました。
		お姉ちゃんになるという自覚を持つと同時にしっかりしなきゃと思うようになることは、自立の一步なのかなと思いました。
		弟を連れ、手を引いて歩きました。大人がいないことで自分自身で何とかしなければいけないという思いが生まれ、自立心が芽生えます。
		(絵本を真似て)遊びの中でも何かを植える活動を入れたごっこ遊びをやったが、この体験で私自身成長できたのではないかと思った。
		母にちゃんとひとりで留守番が出来たことなど得意げに話しました。少し大人になれた気持ちになりました。
何事も経験して「やる意味」を感じることが大切だと思いました。その意味を知ることで、成長していくのではないかと、思いました。		
自己を確認するのは、文字や形でなくても、人と人のコミュニケーションや伝わってくるぬくもりでもできることだと考えた。		
喪失	2	絵本を真似て)遊びの中でも何かを植える活動を入れたごっこ遊びをやったが、この体験で私自身成長できたのではないかと思った。
		久しぶりにこの絵本を読んで、改めておばあちゃんとの思い出がよみがえりました。
		私たちも後悔しないように、伝えたい気持ちはきちんと伝えるべきだと思いました。

づき、自分自身の取り組み姿勢に言及する記述が見られた (n=6)。1年生では実習の際の絵本の読み聞かせに関するエピソードを取り上げ、今回の経験を活かして次回に臨みたいといった記述も見られた (n=4)。

一方2年生は実習体験から「実習をしている時に、妹や弟が生まれて寂しくて友達に意地悪をしてしまう子がたくさんいて、読んだらいいかな、と思ったから。」など、実際の現場を体験した際の子どもの様子を踏まえた気づきに関する記述も見られた。

## 2) 場の共有に関する記述—絵本を通じた他者との関係性に対する気づき

グループ発表の感想として、「みんながどんな思いで幼い頃を過ごしてきたのか分かりました。そういうことを忘れずに子どもと接していきたいです。」「色々な発表を聞いてエピソードの部分がすごく共感できたり、こんなことがあったんだなど驚かされることもあって、すごく楽しかったです。」(1年生)、「みんな真剣に聞いてくれて、感動してくれたり、『お礼が言えたらいいね。』と言ってきて、嬉しかった。」「みんなも昔経験したことがあるようなことだったので、共感して聞いてくれてよかった。」(2年生)など、同じようなエピソードを持つ仲間と時間的、空間的な場を共有できたことを肯定的に評価する記述が見られた(1年生n=6, 2年生n=17)。2年生は全体の約3割の学生が自伝的記憶のエピソードをグループで共有出来たことに言及しており、それを良い体験として評価していた。また2年生の場合、同じような体験をしたことを「共感」と記述していたが、「同じ本を読んでいたけど、それぞれエピソードが違うと思いました。おつかいなのに、全く違う体験の子もいました。」「自分と違う想いや感情を持っているんだな、と感じた。」など、他者との受け止め方の違いが見られた場合も「そんな見方があるんだな、でもそれでも良いと思う。」等肯定的な評価をしていた。

過去の重要な対象との関係性について、主に母親との心温まるエピソードを取り上げた学生が多かったが、内容は母親の視点に立ってその時の自分の体験を客観的に見つめるというものが多く見られた。過去の幼かった自分に温かいまなざしを

送ってくれていた当時の母親と同じ目線に立ち、母親の気持ちを理解し、現在も変わらず愛情を注いでくれる母親に感謝する、といった内容の記述であった。

## 3) 保育者と親の視点に関する記述—育てる側としての自己への気づき

2年生の記述の中で、「(自身の好奇心旺盛であったエピソードに続いて)子どもの頃はとても好奇心旺盛なので、なんでも興味を持ちやらせてあげることで、自分でいろいろな力が育っていくのではないかな、と思います」「(遊ぶことでケーキを食べたい欲求を我慢出来たというエピソードに続けて)相手と一緒に言葉遊びに関わらず楽しく遊ぶことは、より我慢するということを意識しないで待ってられると思う。小さい子どもにはとてもいい方法だと思う。」「自分の失敗やエピソードを思い出して、子どもに共感できたり、汲み取ったりできる保育者になりたいと思いました。」「折り紙やけん玉など発達に合わせて教えてもらおうと子どもたちも次の世代に教えることが出来るので幅が広がっていくと思います。」等、絵本の主人公の体験と自分自身の発達の物語を重ね、それを自分の理想とする保育者像の視点から、客観的に子どもの発達として理解しようとする記述が見られた。

また「私に赤ちゃんが生まれた時は、今まで教わったお母さんからの愛情を十分にそそぎたい。」「私も母親になったら、今度は母親側の体験をすることになります。子どもも親も成長できる機会なので、是非子どもに体験させてあげたいな、と思います。」「(子どもには)苦手なことを見つけ、無理に頑張らせるのではなく、得意なことを見つけ、伸ばしてあげるという働きかけを、心がけたいと思いました。」「幼少期のさりげない体験の中にも成長になる経験につながっているんだと思うと、たくさんの経験をさせてあげられるよう子育てをできたらな、と思った。」(1年生)「自分もいつか、子どもができたら、母と父のように、子どもの夢を壊さないよう育てていきたいと思う。」「親の演技力は本当にすごいです。」「子どもにはこのような体験ができるようなところへ連れて行きたいし、絶対読みたい本です。」「私も子どもにも体験を繰り返し教えてあげたいです。」「私も子ども

が生まれたときに読んであげたい1冊です。」「私も母親になったら、今度は母親側の体験をすることになります。お互いに苦労はあると思いますが、子どもも親も成長できる機会なので、是非子どもに体験させてあげたいと思います。」(2年生)等、自分自身と親とのつながりを想起し評価したことから、自分自身が親になったときにこうしたい、という希望を述べた記述が見られた(1年生n=2, 2年生n=10)。

#### 4) 新たな学びの経験の記述—課題の目的への気づき

今回の課題に関する感想の中で、「絵本もテーマがあり、自分も同じような体験をしていたのだと気付くことが出来ました。」「主題を持ち絵本を読むと、登場人物の考え方や周りの状況なども変わって見えるようになりました。気付いたことをまとめて意見をもらい、更に変わったように思えました。」「主題を持ち絵本を読むと、登場人物の考えや周りの状況なども変わって見えるようになりました。変わって気付いたことをまとめ、発表すると意見をもらい、さらに変わったように思えました。」(1年生)等、グループワークを通じた体験によって自他への気づきを相互的な学びへと発展出来た記述が見られた。また「不安な気持ちを解消したり、共有したりできるのも絵本の良さであると感じた。発達段階に合わせて絵本を選ぶことは、より物語の中に入り込めたり、自分のことと照らし合わせて考えてみたりすることが出来る

ので、大切だと思った。」(1年生)、「出会った絵本で子どもの頃の思い出をよみがえらせることが出来、子どもの頃の自分を客観的に見ることが出来ました。」「子どもの頃のことは忘れてしまいそうだが、経験したことや体験したことは意外にも忘れないものだと思います。そしてとてもよい経験が出来たと改めて感じました。」「絵本を読んで自分と例えたり共感したりして、エピソードが生まれることは面白いなと思いました。」「幼い頃に考えていたことは馬鹿にされるかもしれないが、それと同時に未来につながっている大切な考えなんだな、と思いました。」「その頃があるから今の私があるのだが、私の幼い頃に似た子どもを見るととても恥ずかしい。ギャーッと叫びたくなる。」(2年生)等、今回の課題を通じて、時空間を超えて過去の子どもの頃の自分に出会い、現在の視点で客観的にその当時の自分を見つめ、理解する機会になったようであった。また「自分の経験したことのある感情だと絵本に引き込まれやすいのだと思いました。」「絵本には自分が経験してきたことと同じようなストーリーがあることを気づかされた。小さい頃に経験したことが、今になると同じ内容で(絵本に描かれているため)、それぞれの絵本に(読み手側が)思い入れがあるんだと思いました。」(2年生)等、今回の新たな学びの体験を、自己の既存の枠と参照しながら受け止めている記述が見られ、今回の課題の意図するところへの気づきが得られたようであった。

表3 自由記述による視点別全体の感想

テーマ	学年	記述の内容
読み聞かせの意識	1	緊張した気がするけど、一定の速度で読むことは心がけていたので、ほめてもらえました。(中略)今日の発表を踏まえ、実践する時はもっと頑張ろうと思います。 『お風呂入らないと汚い』など、子ども達に教えたい時にこの絵本を読んであげると良いと思った。
	2	緊張した気がするけど、一定の速度で読むことは心がけていたので、ほめてもらえました。(中略)今日の発表を踏まえ、実践する時はもっと頑張ろうと思います。 実習をしている時に妹や弟が生まれて寂しくて友達に意地悪をしてしまう子がたくさんいて、読んだらいいかな、と思ったから。
場の共有	1	みんな人生は別々なのに、いろいろなところで空想遊びや友達とのけんかなど、同じような体験をしていることが分かった。何か面白いことだな、と思った。 みんながどんな思いで幼い頃を過ごしてきたのか分かりました。そういうことを忘れずに子どもと接していきたいです。
	2	色んな発表を聞いてエピソードの部分がすごく共感できたり、こんなことがあったんだなど驚かされることもあって、すごく楽しかったです。
		みんな真剣に聞いてくれて、感動してくれたり、『お礼が言えたらいいね。』と言ってくれて、嬉しかった。
		みんなも昔経験したことがあるようなことだったので、共感して聞いてくれてよかった。
		同じ本を読んでいただけ、それぞれエピソードが違うと思いました。おつかいなのに、全く違う体験の子もいました。 自分と違う想いや感情を持っているんだな、と感じた。 そんな見方があるんだな、でもそれでも良いと思う。

テーマ	学年	記述の内容
保育者と親の視点	1	幼少時のさりげない体験の中にも成長につながっているんだと思うと、たくさんの経験をさせてあげられるよう、子育てをできたらしいな、と思った。
		私が将来母親の立場になったら、この絵本のお母さんのように答えてあげたな、と思いました。
		自分の思い出と照らし合わせると、絵本をより深く読むことが出来、子どもたちにも伝えていきたいと思うようになりました。
		私に赤ちゃんが生まれた時は、今まで教わったお母さんからの愛情を十分にそそぎたい。
		私も母親になったら、今度は母親側の体験をすることになります。子どもも親も成長できる機会なので、是非子どもに体験させてあげたいな、と思います。
		子どもには)苦手なことを見つけ、無理に頑張らせるのではなく、得意なことを見つけ、伸ばしてあげるという働きかけを、心がけたいと思いました。
		幼少期のさりげない体験の中にも成長になる経験につながっているんだと思うと、たくさんの経験をさせてあげられるよう子育てをできたらな、と思った。
	2	自分の失敗やエピソードを思い出して、子どもに共感できたり、汲み取ったりできる保育者になりたいと思いました。
		(自身の好奇心旺盛であったエピソードに続いて)子どもの頃はとても好奇心旺盛なので、なんでも興味を持ちやらせてあげることで、自分でいろいろな力が育っていくのではないかな、と思います
		保育士として、たくさんの絵本を読んだり、経験をさせてあげたり、子ども達にたくさんのことを教えてあげたいと思いました。
		将来母親の立場になったとき、きっと経験することがあると思うので、みんなの発表の内容を参考にして、子どもと接したいです。
		(遊ぶことでケーキを食べたい欲求を我慢出来たというエピソードに続けて)相手と一緒に言葉遊びに関わらず楽しく遊ぶことは、より我慢するということを意識しないで待てられると思う。小さい子どもにはとてもいい方法だと思う。
		折り紙やけん玉など発達に合わせて教えてもらって子どもたちも次の世代に教えることが出来るので幅が広がっていくと思います。
		自分もいつか、子どもができたら、母と父のように、子どもの夢を壊さないよう育てていきたいと思う。
		親の演技力は本当にすごいです。
		子どもにはこのような体験ができるようなところへ連れて行きたいし、絶対読みたい本です。
		私も子どもにも体験を繰り返し教えてあげたいです。」「私も子どもが生まれたときに読んであげたい冊です。
		私も母親になったら、今度は母親側の体験をすることになります。お互いに苦労はあると思いますが、子どもも親も成長できる機会なので、是非子どもに体験させてあげたいなと思います。
新たな学びの経験	1	絵本でもテーマがあるということ、自分も同じような体験をしていたのだと気づくことが出来ました。
		主題を持ち絵本を読むと、登場人物の考え方や周りの状況なども変わって見えるようになりました。気付いたことをまとめて意見をもらい、更に変わったように思えました。
		主題を持ち絵本を読むと、登場人物の考えや周りの状況なども変わって見えるようになりました。変わって気付いたことをまとめ、発表すると意見をもらい、さらに変わったように思えました。
		不安な気持ちを解消したり、共有したりできるのも絵本の良さであると感じた。発達段階に合わせて絵本を選ぶことは、より物語の中に入り込めたり、自分のことと照らし合わせて考えてみたりすることが出来るので、大切だと思った。
		今まで絵本を読むときは内容だけしか聞けなかったけど、エピソードを考えながら読むとさらに絵本に入りやすく楽しさが何倍にもなりました。
	2	幼い頃に考えていたことは馬鹿にされるかもしれないが、それと同時に未来につながっている大切な考えなんだな、と思いました。
		子どもの頃のことは忘れてしまいそうだが、経験したことや体験したことは意外にも忘れないものだと思います。そしてとてもよい経験が出来たと改めて感じました。
		絵本を読んで自分と例えたり共感したりして、エピソードが生まれることは面白いなと思いました。
		出会った絵本で子どもの頃の思い出をよみがえらせることが出来、子どもの頃の自分を客観的に見ることが出来ました。
		その頃があるから今の私があるのだが、私の幼い頃に似た子どもを見るととても恥ずかしい。ギャーツと叫びたくなる。自分の経験したことのある感情だと絵本に引き込まれやすいのだと思いました。
絵本には自分が経験してきたことと同じようなストーリーがあることを気づかされた。小さい頃に経験したことが、今になると同じ内容で(絵本に描かれているため)、それぞれの絵本に(読み手側が)思い入れがあるんだと思いました。		
発達に関する気付き	1	(絵本と自身の歯磨きの自立のエピソードから)何事も経験して「やる意味」を感じる事が大切だと思いました。その意味を知ることで、成長していくのではないかな、と思いました。
		なぜおもちゃの野菜などを使わずに広告の切り抜きを使っていたのかはわからないが、今この年では思いつかない遊び方だと思う。小さい頃は感性や想像力が豊かだからかもしれない。
	2	人と関わることで、大人になれた部分が主人公に共通している。
		小さい頃の些細な体験が今のコミュニケーションの場として形を変えて残っているのだと思う。
		『自分が言うことは全て正しい。世界は自分中心に回っているのだ。』と素晴らしいくらいの上から目線でものを言っていた子ども時代だった。
おばあちゃんの昔ながらのことを子どもたちに代々教えていくことで、子どもたちもその年齢にあったものを教えてもらい、発達の段階に合わせて自分のものにしていくことが出来ます		

5) 子どもの発達に関する気づき

例として「(絵本と自身の歯磨きの自立のエピソードから) 何事も経験して「やる意味」を感じることが大切だと思いました。その意味を知ること、成長していくのではないかな、と思いました。」(1年生)、「なぜおもちゃの野菜などを使わずに広告の切り抜きを使っていたのかはわからないが、今この年では思いつかない遊び方だと思う。小さい頃は感性や想像力が豊かだからかもしれない。」「人と関わることで、大人になれた部分が主人公に共通している。」「小さい頃の些細な体験が今のコミュニケーションの場として形を変えて残っているのだと思う。」「『自分が言うことは全て正しい。世界は自分中心に回っているのだ。』と素晴らしいくらいの上から目線でものを言っていた子ども時代だった。」「おばあちゃんの昔ながらのことを子どもたちに代々教えていくことで、子どもたちもその年齢にあったものを教えてもらい、発達の段階に合わせて自分のものにしていくことが出来ます」(2年生)等、自らの経験を振り返る作業の中で「自分の中に発達を読む」ことによって、子ど

もの発達に対する理解を深めた記述が見られた。

IV. 考察

通常保育や教育の現場では、絵本や物語は読み聞かせの材料として使用されることが多い。「読み聞かせ」は、読み手と聞き手が絵本という場を共有し、言葉を媒介に、読み手側が書かれたストーリーを読むという行為を通して聞き手側に創造的な空間を提供することを意図している。

一方「絵本を読む」という行為は、絵本対自分の受動的な行為である。絵本の主人公は子どもや親しみやすい動物であることが多く、遊びや生活習慣などの日常が描かれているものが多い。子どもは主人公に同一化し、異質なものと出会っては想像を膨らませて共感的な理解を行いながら、内的なイメージを豊かに広げて行く。今回の課題では、各々が絵本を読むという受動的な行為から想起した自己の発達のストーリーを参照しながら、ナラティブという結果として、能動的に発信するという流れになっている(図3)。

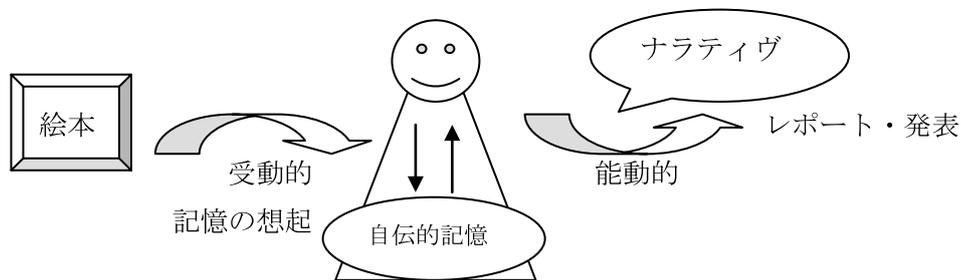


図3 課題の流れ

今回の結果について、「時間軸上に連続性を持つ自己の同定」と「関係性の中での自己の同定」、「次世代を育む自己」という三つの視点から考察を加える。

1. 時間軸上に連続性を持つ自己の同定—自伝的記憶の方向づけ機能と時間的展望

絵本の読み方は大きく分けて、物語の主人公に自分を投影し没頭する場合と、自分の体験や現実の世界と絵本の世界を比較ながら関わるという、二つの関わり方に分けられると言えよう。今回は自伝的記憶の想起を促したため、後者の立場で絵本と対面したものと思われる。そのため、結果の1)に見られるように、特に実習経験の少ない1年

生の場合、保育者として絵本を現場でどのように活用したらよいのか、また受け手を前にして自分自身はどうあるべきなのかといった、「将来の保育者としての自分」を考える機会になったのではないと思われる。一方2年生に同様の記述が少なかった理由は、既に実習での経験知から、自分なりの現実的な保育者像をある程度確立しているためではないかと推測される。結果で取り上げたが、自分の思い描く保育者の視点から、絵本の主人公と重ねた自分自身の発達の物語を客観的に理解することは、自分も絵本の主人公と同じ、誰かに「見守られる」側であった子ども時代を持っていたこと、それを現在に近い将来「見守る」側となる保育者としての自分が理解するという、現在を起点

に過去と将来の自己が時間軸上に織りなされ、相互性を鍵に、「見守り見守られる」存在としてつながる体験への気づきを意味しているのであろう。

白井(2001)<sup>4)</sup>は大学生と専門学校生に「将来大きくなったら何になりたいか」という回想することが、進路選択にどのように影響を与えるかという研究を行っている。取り組みをしていない場合と比較して、職業選択への関心を高め、自己肯定・自己理解を促し、目標・計画性を高めることが出来るという結果を得ている。

2年生の場合、保育者となって現場に立つという将来は遠い未来ではなく、目前に迫っている現実である。一方1年生の場合は、実習体験が少ないため、将来の保育者としての自分の姿は描きにくく、課題実施時はまだ遠い未来のように感じられていたと思われる。しかし今回の課題を通して、これまでは絵本の受け手としての経験が主であった1年生も、絵本の読み手としてのあり方、つまり将来の保育者としての自分を意識する機会となり、将来の目指すべき保育者姿をある程度思い描くことが出来たのではないかと考えられた。

絵本の読み聞かせの体験に重きが置かれる課題と違って、今回の自伝的記憶を想起するという課題を与えることは、自伝的記憶の機能である「方向づけ」によって、「過去を振り返って現在の自分が過去の自分を見つめ」、さらに「過去と現在の自分を対比してこれからの自分のありかたを考える」という時間的展望の効果をもたらしたと言えよう。時間的展望とは、ある時点において、自分の未来に希望を抱いたり、過去を振り返って受け入れたりすることとも言える。白井<sup>21)</sup>は時間的展望の中

でも過去をくぐって未来を構想する意義について、①過去をくぐることで未来展望が精緻化される、②過去を受容し、時間を未来に流すことが出来る、③時間的な連続性をつくりだし、アイデンティティをもたらす、と述べている。また未来を構想するために過去をくぐるのは、①目標や計画を精緻化するとき、②協同を実現するとき、③過去化していない経験があるとき、④困難や障壁が生じたとき、⑤予期せぬ結果や出来事が生じたとき、を想定している。時間的展望を持つことは、現在を起点に過去を意味付け、具体的に保育者としてのあり方(未来)を描くことで逆に現在やるべきことや方向性が規定されるという、時間軸上に連続性のある自己のあり方を位置付ける作業を行うことが出来ると思われる。つまり、今回の絵本の課題を通して「自分の中に発達を読む」体験をし、現在の自分自身の内界にある過去との対話を行うことで、過去から現在、未来へとつながる自己の存在を確認し、そこに新たに保育者としてのアイデンティティの萌芽を見る経験になったと言えよう。

## 2. 関係性の中での自己の同定—ナラティブが生まれる基盤

今回の課題は、絵本を読むという、絵本の世界を受け身で体験することから始まる。秋田<sup>7)</sup>は「ことばへの信頼はことばで周囲を変えていくことができるという主体性や能動性の認識ではなく、ことばによって自らが変わっていくという応答性や受動性から始まる。」と述べている。言葉は他者との関係やそこで生まれる対話や内的な自己との対

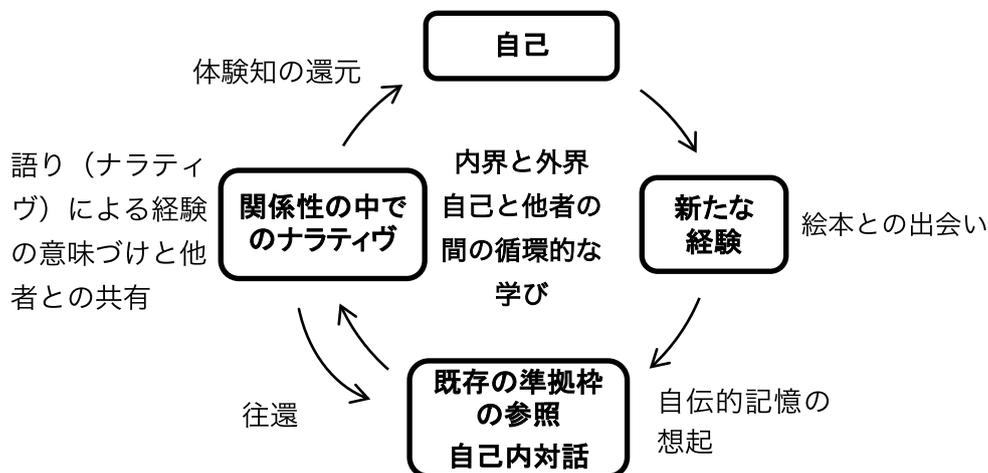


図4 課題を通した循環的な学びのモデル

話を媒介するものである。今回の課題では、まず作者の言葉を受け止めることで始まるが、次に自伝的記憶の想起によって自己の内的世界や過去の世界を振りかえってレポートを作り、さらにそれを発表の場で他者との間に耐えうるものとして言葉で語る行為、つまりナラティブが生まれるという一連の流れを体験する（図4）。感想でも述べられていたように、ナラティブを通して発表の場で他者と世界を共有することは、他者と同一化するだけではなく、他者との差異を共感的に受け止めて自分の世界に変化が生まれ、新しい自分を体験することを受容することも包含している。「学ぶ」という行為は、自己の育ちを支える環境との関係性が基盤に存在してそこに対話が生まれ、内界や外界との交流を通して、絶え間ない自己の変容の過程が醸成されるプロセスを包摂しているものなのであろう。

### 3. 次世代を育む自己

2年生は目前に迫った就職に向けて、保育者としての新たな職業的アイデンティティの獲得を求められている時期に当たる。人生の大きな転回点とも言えるこの時期に幼少期の記憶を振り返る中で、自らの育ちを振り返って重要な対象との関係性を再認識した学生が多く見られた。結果に見られたように、主に母親との関係を想起することで、「育てられる」側から、今度は自身が保育者として、または母として、「育てる」側になるというアイデンティティを意識する機会になったと思われる。

特に母親に対するイメージは肯定的なものであり、エピソードの中で見られた母親の機智に富む言葉や二者間の生き生きとした交流は、時を経た今でも色あせないものであった。エピソードで描かれた、温かいまなざしを持って見守り続ける母親像は、現時点で理想とする保育者像や母親像と重なるイメージとして連想されており、学生各々が持つ「子どもを慈しみ大切に育む人」のモデルとして内在化されているものなのであろう。

### V. 結論

今回の一連の課題の様に、絵本という対象に関わって身体感覚や五感を通して学ぶ直接的な体験と、対象に触れることで自身の過去を振り返って内的な自分を見つめるという間接的な体験を同時

に行うことは、豊かで循環的な学びを深める機能を担っていると言えよう。

人は有機的な存在であるからこそ、現在から過去を振り返ることで自己を時間の流れの中に見つけようとする。今回の課題である、絵本の物語を題材に自伝的記憶の想起を行うという経験は、絵本の世界と自身の内的な世界を重ね合わせて見ることで、発達という時間軸の上に過去の自己を現在に同定する作業を行うことであった。その作業を通して重要な対象との関係性を振り返り、支えてくれる存在に感謝し、大切にされた自分自身の生を愛し慈しむことが出来る。このような一連の体験は、将来育てる側の保育者として保育現場で子ども達に出会った時に、その育ちを自分自身の過去と重ね、照らし合わせて理解し、子ども一人ひとりの生を尊厳あるものとして受け止められるような、温かで共感的なまなざしを持つ「保育者としてのアイデンティティ」を獲得することにつながるのではないかと思われた。

保育士や幼稚園教諭を養成する短大の場合、2年生間という限られた時間の中において、講義で必要な知識を学び、実習で実践的な学びの機会を得ながら保育者としての職業的なアイデンティティを築いていくことが求められている。カリキュラムにはゆとりを持って学ぶ余裕はなく、自らの学びを振り返って味わい、十分に理解することが出来ないまま社会に巣立っていく。指導する側の教員としては、学ぶ側にとっていかに効率的で密度の濃い学びとの出会いの場を設定するかということが課題になる。さらに保育者というアイデンティティを学びの中で意識させること、学生の自己の育ちを支えるような場を提供することは極めて難しいと言わざるを得ない。

自己の育ちは知識やスキルを単純に教員側が教授することでは達成できない。前述のモデルに見られるように、受け取る側が過去の経験を通して獲得したものを引き出す作業に付きあい、そこに現在の経験による新たに色づけを加えていくプロセスの手助けをすることこそ、自発的な学びを生み出す環境を提供することであると考える。それは経験に伴って自己の新たな塗り直しをすることである。特に青年期以降は、日々の経験によって過去の時間的な流れの中で構築された自己を引き出し、新たな意味付けを加えて再び内界に納めて

いく作業が、豊かな学びのスタイルであると思われる。そのためには、まずは教員が学生各々を時間軸上につながるかけがえのない存在として理解することであり、そのことが自己の発達を促す学びの基盤になるのであろう。

今回の課題は、学生にとって「絵本を読むこと」に関する新たな視点を獲得する機会になったと思われる。彼らが現場で絵本を手にとった時に今回の体験を想起し、絵本を媒介にして、子どもたちに彼らの思いを伝えて相互に共有できる場を体験出来るならば、そこでまた「保育者としてのアイデンティティ」が新たに書き換えられるはずである。今回の経験が今後の保育者として、また母となって次世代を育てる人間としての彼ら自身の循環的な学びの一助となるよう願っている。

#### 引用文献

1. 秋田喜代美, 無藤隆 幼児への読み聞かせに対する母親の考えと読書環境に関する行動の検討, 教育心理学研究 44, 1996, pp.109-120
2. 厚生労働省 保育所保育指針解説書, 厚生労働省雇用均等・児童家庭局保育課, 2008/04 <http://www.mhlw.go.jp/bunya/kodomo/hoiku04/pdf/hoiku04b.pdf> (2010-01-31)
3. 佐藤浩一, 越智啓太, 下島裕美編著 自伝的記憶の心理学, 北大路書房, 2008, pp.15-36
4. 白井利明 青年の進路選択に及ぼす回想の効果—変容確認法の開発に関する研究 (I), 大阪教育大学紀要 (第IV部門) 49, 2001, pp.133-157
5. 文部科学省 幼稚園教育要領解説, 2008/07 [http://www.mext.go.jp/a\\_menu/shotou/new-cs/youryou/youkaisetsu.pdf](http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/new-cs/youryou/youkaisetsu.pdf) (2010-01-31)

#### 参考文献

6. 秋田喜代美, 増田時枝, 絵本で子育て 子どもの育ちを見つめる心理学, 岩崎書店, 2009
7. 秋田喜代美, 石井順治編 ことばの教育と学力 未来への学力と日本の教育 4, 明石書店, 2006
8. 秋政 邦江, 中山 芳一, 伊藤 智里 保育者の共感性向上のためのカリキュラム開発: 絵本を教材とした共感意欲向上カリキュラムを中

- 心に, 川崎医療短期大学紀要 29, 川崎医療短期大学, 2009, pp.43-48
9. 岩田純一 記憶と自己の発達 (特集自己と記憶) 心理学評論, 心理学評論刊行会 51 (1), 2008, pp.24-36,
  10. Erikson, E.H. Identity and the life cycle; selected papers, New York: International Universities Press, 1959 エリク・H・エリクソン著, 西平 直・中島 由恵訳 アイデンティティとライフサイクル, 誠信書房, 2011
  11. 太田 礼穂 養育者は子どものどのような応答を絵本の物語理解とするのか? - 主観的理解からの検討 (中間報告) (平成21年度学術研究助成事業による論文 (中間報告として), 発達研究 24, 発達科学研究教育センター, 2010, pp.195-202
  12. 奥山 俊子 保育者養成校における美術展「鑑賞」授業ノート: 絵本と「感じ取る力」・「伝え合う言葉」の育成を目指して, 山形短期大学紀要 41, 山形短期大学, 2009, pp.49-61
  13. 奥山 優佳, 香曾我部 琢 想像世界の共有化を修辞する保育者の身体技法--クラス活動における絵本の読み聞かせの相互行為分析より, 東北生活文化大学・東北生活文化大学短期大学部紀要 (39), 東北生活文化大学, 2008, pp.41-47
  14. 尾崎 恭子 幼児の精神発達と絵本, 中国学園紀要 4, 中国学園大学, 2005, pp.61-67
  15. 尾上 明子, 中根 淳子, 村田 康常 保育者養成における生と死の授業, 研究紀要 28, 名古屋柳城短期大学, 2006, pp.61-77
  16. 工藤 真由美 子どもにいのちの大切さ・死の問題を教えること: 保育者養成課程在籍学生の絵本理解から見えてくる課題, 四條畷学園短期大学紀要 41, 四條畷学園短期大学, 2008, pp.26-30
  17. 佐藤 公治, 西山 希 絵本の集団読み聞かせにおける楽しさの共有過程の微視発生的分析, 北海道大学大学院教育学研究科紀要 (100), 北海道大学大学院教育学研究科, 2007, pp.29-49
  18. 佐藤 智恵, 松井 剛太, 上村 眞生, 祝 小力, 趙 京玉 保育者の絵本選択の理由と経験年

- 数との関連に関する研究, 幼年教育研究年報 : The Annual of research on early childhood 29, 広島大学大学院教育学研究科附属幼年教育研究施設, 2007, pp.59-64
19. 佐々木宏子 絵本の心理学—子どもの心を理解するために, 新曜社, 2000, pp.200-201
  20. 白井利明 時間的展望の生涯発達心理学, 頸草書房, 1997
  21. 白井 利明 自己と時間—時間はなぜ流れるのか (特集 自己と記憶), 心理学評論 51 (1), 心理学評論刊行会, 2008, pp.64-75
  22. 下島 裕美 自伝的記憶と時間的展望 (特集 自己と記憶), 心理学評論 51 (1) 2008, 心理学評論刊行会, pp.8-19
  23. Piaget,J. Piaget's Theory of Intellectual Development, Prentice-Hall, 1969 J. ピアジェ 著, 中垣啓 翻訳 ピアジェに学ぶ認知発達の科学, 北大路書房, 2007
  24. ジュリー・サイクス作, ティム・ワーンズ 絵, もりむらかい訳 おふろはいらないもん!, 文溪堂, 1998
  25. Stern, D. The Interpersonal World of the Infant; first Paperback Edition, New York: Basic Books, 2000
  26. 添田 雅彦, 藪中 征代 集団への絵本の読み聞かせに対する保育者の意義の認識, 教材学研究 22, 日本教材学会, 2011, pp.41-49
  27. 高橋 順子, 藤 敏元 絵本の読み聞かせを用いた保育の展開, 埼玉大学教育学部附属教育実践総合センター紀要 6, 埼玉大学教育学部附属教育実践総合センター, 2007, pp.201-208
  28. 長根 利紀代 保育実践における子どもの発達と絵本の活用についての一考察, 研究紀要 27, 名古屋柳城短期大学, 2005, pp.69-81
  29. 野村 晴夫 自己を語ることと想起すること--心理療法場面を手掛かりとしたその機能連関の探索 (特集 自己と記憶), 心理学評論 51 (1), 心理学評論刊行会, 2008, pp.99-113
  30. 広渡 純子, 松井 一恵, 小坂 芙由子 保育者養成における学生の絵本利用に関する考察--聖和大学「おもちゃとえほんのへや」が目指してきたもの, 聖和大学論集 A・B, 教育学系・人文学系 (36), 聖和大学, 2008, pp.3-192
  31. Bluck,S., Alea,N., Habermas,T., Rubin,D. A Tale of Three Functions; The Self-reported uses of Autobiographical Memory, Social Cognition. Vol.23.No1, 2005, pp.91-117,
  32. Bluck,S., Autobiographical memory: Exploring its functions in everyday life, Memory 11 (2) , 2003, pp.113-124
  33. Bluck,S. & Habermas,T. The life story schema, Motivation and Emotion 24 (2) ,2000, pp.121-147
  34. Pasupathi,M. & Mansour,E. Adult Age Differences in Autobiographical Reasoning in Narratives, Developmental Psychology Vol.42, No.5, American Psychological Association, 2006, pp.798-808
  35. 松井 剛太, 佐藤 智恵, 上村 眞生 保育者の考える「読解力」に関する研究: 読み聞かせにおける絵本の選択理由から, 広島大学大学院教育学研究科紀要第三部, 教育人間科学関連領域 (56), 広島大学大学院教育学研究, 2007, pp.325-332
  36. 無藤隆監修・編著, 神長美津子, 秋田喜代美 編著 よくわかる2009年4月施行幼稚園教育要領, ひかりのくに保育ポケット新書, ひかりのくに, 2009
  37. 無藤隆監修, 高濱裕子編者代表 事例で学ぶ保育内容 領域言葉 萌文書林, 2007, pp.31
  38. 森敏昭編 おもしろ記憶のラボラトリー, 北大路書房, 2001
  39. 森光 義昭, 関 聡 幼児教育における絵本教材化の観点, 久留米信愛女学院短期大学研究紀要 33, 久留米信愛女学院短期大学, 2010, pp.41-50
  40. 山本晃輔, 金敷大之 絵本を手がかりとした幼少期における自伝的記憶の内容分析 教育実践総合センター研究紀要 19, 奈良教育大学教育実践総合センター, 2010, pp.47-51,
  41. 横山 真貴子 読み聞かせを構成する保育者の思考と行動--同一絵本の3回の読み聞かせ場面の分析から, 人間文化論叢 (2), お茶の水女子大学大学院人間文化研究科, 1999, pp.169-181

42. 横山 真貴子, 水野 千具沙 保育における集団  
に対する絵本の読み聞かせの意義--5歳児ク  
ラスの読み聞かせ場面の観察から, 教育実践  
総合センター研究紀要 (17), 奈良教育大学  
教育学部附属教育実践総合センター, 2008,  
pp.41-51